六花

風華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
六花

【Ｎコード】
Ｎ２５９０Ｊ

【作者名】
風華

【あらすじ】
２２世紀の日本。第三次世界大戦が終わって５年。
国民たちは理不尽な政府や世界に不満を抱きながらも、その色に染まることに従う。
だが、その中でもそれを良しとせず抗う者たちがいた。
６つの花弁を持つ１輪の花～六花～
東京を舞台に反政府組織と武装警察の息の合わない小競り合いが勃発

第1話

子供の騒ぐにぎやかな公園。その一角で、一人の女性が元々はしっかり羽織っていたであろう黒い上着をベンチに投げ捨ててグッタリとしている。
蝉の代わりになるくらい肌がジリジリと言いそうなほどの日光が彼女を照りつける。汗が流れ、はだが黒く焼け、わずかにほてっている。
赤と白のネクタイをたたんで目を隠し、片手でそれを押さえるその様子はもう虫の息のようにも見える。
つい一時間ほど前まではちょうどこのベンチは木の陰に隠れていたというのに。もうこの公園で日の当らない座れる場所はない。あったとしてもきっと日射病＋熱中病になりかけたこの状態で動こうとはしないだろう。
―――だいたい制服がこんなに暑っ苦しいからバテるんだ・・・・・。
そんなこんなである種殺気だっている彼女に近づく者はいない。犬や猫でさえも。
ただ、明らかに具合が悪いとみて取れる彼女に誰も声をかけようとしない理由はそれだけではない。彼女の傍らに置かれている刀。そして武装警察を示す袖もとのバッヂ。
それらが彼女へ近づく者たちを０に近くしていた。一般人に限っての話だが。
ハッキリと近寄るなオーラを発しているそんな彼女に一人分の影が

かかる。一人分の男性だ。
彼女と同じような服は暑いながらにしっかりとまとい、そのひたいには汗と同時に青筋が浮かび上がっている。
彼女は気づいているのだろうか。自分の目の前に腕を振り上げている男がいることを。それとも彼が自分に危害を加えないと確信でもあるのか。はたまた、それを避けるという自信でもあるというのだろうか。
次の瞬間、ドゴっという鈍い音と「ヴっっ・・・・・」というううめき声がその場で消えうせた。
「オイコラ久野本。起きろやゴラ」
女性に向かって腕を振りろした男は、その腕でまだ冷たいと言える缶コーヒーを彼女の頬にあてる。一か所だけ大きくへこんでいるのが気になるが。
あてられた本人は「冷たい・・」と一言つぶやいて目を開けた。覗いた瞳は血のように赤い。
それは心底面倒くさいという感情を表しており、殴られた頭を押さえながらコーヒーを受け取った。
「っのやろ・・。コーヒーで頭叩くこたぁねぇだろ夕月」
「勤務中に惰眠むさぼってるやつに言われたかぁねぇよ」
本来はアルトソプラノであろう声のトーンを、地獄の底から響いてきたような恨めしいものにして夕月という男を咎める。が、単純に言えばサボっていた彼女に説得力はない。
「さっさとそれ飲んで巡回いけ」
コーヒーを一気飲みして尚、ベンチから立とうとしない彼女に夕月は命令する。脅しの意味も込めて腰に下げられている刀を一回鳴らすが、彼女にとってそんなものは何にもならない。
「えー、ヤダし。あたしを働かせたいんだったら公園にクーラー常備してよ」
「もう一回ガツッといくか？」
クーラーをもし本当につけたとしてもこの女は絶対くつろいでばか

りで動こうとしないだろう。むちゃな要求をするあたりがそれを物語っている。
そんなヤル気がマイナス１００度の彼女を、毎度のことながら根気よく注意している夕月は早くも抜刀したくなったがそこは我慢する。だいたいここ公園だし。たとえ切っ先を眼前に掲げてやったとしても言うことなんて聞いちゃぁくれない。
日に日に募るこの行き場のないストレスがため息となって消えてくれればいいのに。
「久野本。お前自分の立場どんなものかわかってんのか」
「政府警察庁直属組織武装警察アサシン副総長」
缶コーヒーの空き缶を燃えるゴミのゴミ箱に投げ入れ、左手で腰に刀を差した。上着を肩に引っ掛け、汗で首にまとわりつくセミロングの髪をうっとおしげに後ろへとやる。
ノンブレスで一気に役職を言いきった組織のナンバー2。
それを見る夕月。彼もまた同じ役職の者である。そうでなければ命令など出来ないほどの立場であるが。彼女に本当にその自覚はあるのか。あったとしても見てくれからしてヤル気など無いだろう。
そんな同僚の姿をしっかり見張るしかない夕月にはストレスの種にしかならない彼女。本当は有能なのだが・・・。
「夕月」
過去に何度考えたか知れないそれを今まさに思案していた彼は、突然呼ばれた自分の名に驚きハッと彼女を見る。彼女はすでに公園の出口で立っていた。コーヒーでだいぶ回復したのか、ずいぶんと顔色が良くなっている。
「先行くよ。コーヒーごちそうさん」
あぁ。と返事をするころにはもうすでに背を向けられていて、夕月はただ一人。ゆっくりとした足取りで宿舎へと帰って行った。

危ない雰囲気を醸し出している裏道。そこを彼女・久野本風華は夕月と別れた約３０分後、歩いていた。
その足取りは確固たるものであり、迷いを感じさせない。一歩一歩歩くたびに革靴が鳴らすカツンという音が建物同士の壁にぶち当たり、反響して不気味に響く。すると、ある扉の前で彼女は止まった。その建物は壁にツタが張り付きながらも、どこか人の住んでいる生活感を感じさせる洋館。裏道でありながらも、建物同士の微妙な高さの差により日の当っているその扉。それにごく自然に手を伸ばし、一般人の家でも自動ドアが普及している今となってはもう天然記念物ものといえる丸い形状のノブを回す。
見た目とは裏腹にギィィなどという不気味な音は案外鳴らず、すんなりと開かれる扉。その向こう側には外側の外観と同様に人が生活している様を感じさせる靴が並べられている。埃も積もっていない。このような所に一体誰が住んでいるというのだろうか。それも複数と思われ、その靴のデザインなどから若者たちであることが分かる。それらの中に自分の靴も混ぜ、彼女はペタペタとだらしなく足音を立てながら洋館の廊下を進む。つきあたりにあるドアの小窓から漏れる光に導かれ、これまた古い形状のドアノブを回し、引いた。
「遅かったじゃん、風華」
開くと同時に差してくるこれまた今となっては少なくなってきている蛍光灯の光。そして高い女性のソプラノの声と、けっこうな音量の音楽が耳に入る。
常ならば顔をゆがめるであろう状況にあるが、こればかりに対しては笑みが浮かんだ。
「ごめん。ちょっと夕月につかまっててさぁ」
「あの副局長さんかよ」

その部屋は大ホールのようで、けっこうな広さがある。今は夏なためついていない暖炉に最も近い位置にある赤いソファの方向から響いてくる声は男の物。
一応彼女のほうを向いているのであろうが、暖炉の方向をソファが向いているため男の顔をうかがうことはできない。が、代わりに手をヒラヒラと振っているので場所は正確に認識できている。
「副局長っつったらあたしもだっつーの。それより他の連中は？」
公園で外していた時とは違い、しっかりつけていたネクタイをスルッと抜き、ジャケットをテーブルに脱ぎ捨てる。
「美樹はキッチン。羅和は散歩に出てったっきり。はるはそこ」
「・・またこいつは」
女が指をさした先には、ヘッドホンをつけたまま食器棚の陰に背をもたれ、ノートパソコンのキーを叩いている眼鏡の女性の姿が。
楽しそうとも、まじめにともとれるその目はモニターばかりを見すえており、風華が入ってきたことなど微塵も気づいてないのか。それとも気にしていないのか。
「ったく」
「あ」
ヘッドホンをするっと取り上げ、すぐそばにあったコンポの音楽もついでに止める。さすがにこれでは耳に悪すぎる。
それらを聞いていた2人の同年代の女に避難の目で見られるがあえて無視をする。
「何すんの風華」
「何すんのじゃねぇよ。お前いいかげんゴシップ記事の作成なんざやめろっての。そのうち叩かれっぞ」
しかもそれを趣味なんて・・、というのは今まで何十回、いや何百回言ってきたかわからないほどなので口に出さない。
「亜弥。早くしてくんね？夕食までに帰んねーとなんないから」
「美樹と羅和に言ってよ」
夕食までにってガキかよ、と茶化す男を軽く睨み、時計を見る。5

時だ。コンポを止めたため、外でカラスが鳴いているのも聞こえる。
ちなみに夕食は7時。この洋館から宿舎まで帰るのに1時間は普通にかかる。急いだとしても４０分は絶対だ。
はぁ、とため息をつく。走るのか。面倒くさい。
「そこらでさぼってたって言えばいいだろうが」
「あたしは夕食に遅れたことはないの」
ムスッとした表情でそう言い返す。が、それは瞬時に崩れることとなった。
今まで絶対だったものがいきなり崩れたら怪しまれンだろ。という言葉とともに。
弱冠傾き始めている日と、裏道から外れた外の喧騒とが窓からまじりあって入ってくるのがはっきりと感じられるほど、静寂が続く。
この大ホールにいる４人の口角が吊り上る。
静まり返ったこのホールに４人分の静かな声が響き渡る。
「そろそろはじまんだろ？亜弥」
「もちろん。夜希は？竜勢のほう大丈夫？」
「誰に向かって言ってんだよ。問題ねぇ、俺の竜勢だ」
「頼もしいじゃん。これではるは単独行動できるってやつ？」
コンポをかけていた時とは何か違う。剣呑な雰囲気がホールを満たす。
「ただ、まだ準備期間は終わんないから。ちょいちょいとしたテロはまだ続けるけどね」
それまで、六花の”夜叉の風”だってこと、バレないでよね。風華。
・・もちろん。だいたいあんなにおもしろいとこ、そうそう離れようたぁしないよ。
「あたしたち六花の晴れ舞台が始まるよ」

表の裏通り（この表現はおかしいかもしれないが）で一枚の紙が宙を舞っている。
そこには＜この顔を見たら１１０番！＞の文字とともに、風華を抜いたあの３人の顔ともう２人の顔写真が印刷されていた。

第1話（後書き）

はじめまして。六花を執筆させてもらっています風華です。
この小説は”政府を守る側アサシン”と”政府にあらがう側六花”の両極端なグループの物語です。主人公風華はその両方に属しています。
これからシリアスありギャグありで書いていきたいと思っていますので、こんな若造ですがよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2590j/

六花

2010年10月11日21時56分発行